

干潟地域のシシトウ栽培における天敵農薬の普及拡大 ～ナミテントウによるアブラムシ類防除現地試験を通じて～

1 課題の目的

干潟地域のシシトウ栽培では、アブラムシ類による被害対策が多くの生産者にとって課題となっている。

そこでアブラムシ類を摂食することで防除効果が期待される特定防除資材(特定農薬)である「飛翔制御したナミテントウ(商品名:Tentrol(テントロール)・以下、「ナミテントウ」)について、現地試験を行うことで天敵農薬の普及拡大に取り組んだ。

2 課題の背景

- (1) 近年、干潟地域のシシトウ栽培においてアブラムシ類による被害とその対策が問題となっている。特にもっと安心農産物や特別栽培などの減化学農薬栽培に取り組んでいる生産者はアブラムシ類防除を目的とした化学農薬の種類や回数に制限があり、被害が抑えられていない。
- (2) シシトウ栽培期間中にアブラムシ類と同様に問題となるアザミウマ類の防除として天敵農薬(スワルスキーカブリダニ)の普及が進んでおり、多くの生産者で活用されている。
- (3) アブラムシ類防除として千葉県立農業大学校が取り扱っているナミテントウについて注目が集まっており、導入に伴う防除効果や使用時の注意点などの確認が求められた。

3 普及活動の経過

- (1) 関係機関との現地検討会の開催

JA ちばみどりや千葉県立農業大学校と協力し、現地検討会を通じてアブラムシ類の対策に係わる情報共有を行った。

- (2) 試験圃の設置

JA ちばみどり出荷生産者と千葉県立農業大学校の協力を受け、ナミテントウの導入によるアブラムシ類防除について、防除効果や現地導入における課題の確認を目的とした現地試験を実施した。

- (3) 病虫害防除方法の見直し

定期的な圃場巡回を実施し、生育状況やアブラムシ類の防除について確認した。アブラムシ類の発生予報や効果的な薬剤散布方法の他、葉かき作業等による物理的防除による病虫害防除について情報提供を行った。



シシトウの花に寄生する
ナミテントウの若齢幼虫

4 普及(調査)活動で得られた成果

(1) ナミテントウによる防除効果の確認と導入時期の見直し

本試験では、1回目として6月8日に200頭、2回目として7月18日に100頭を放飼した。(図1参照)

ナミテントウを放飼し、定着させることでアブラムシ類の防除効果が確認された。特にナミテントウ放飼直後は活動が活発であり、高い防除効果が得られていた。

一方で、放飼後、約1か月で定着率が著しく減少し、併せてアブラムシ類の防除効果も低下した。特に盛夏期は施設内が日中長時間にわたって35℃以上の高温条件となり放飼後、高い定着率を維持出来る期間が短くなった。盛夏期では、追加放飼は導入コストとアブラムシ類の防除効果が見合わず、導入時期を見直す必要があることが分かった。盛夏期を避けた5月～6月、または9～10月の期間に放飼を行うことで一定の防除効果が見込める。

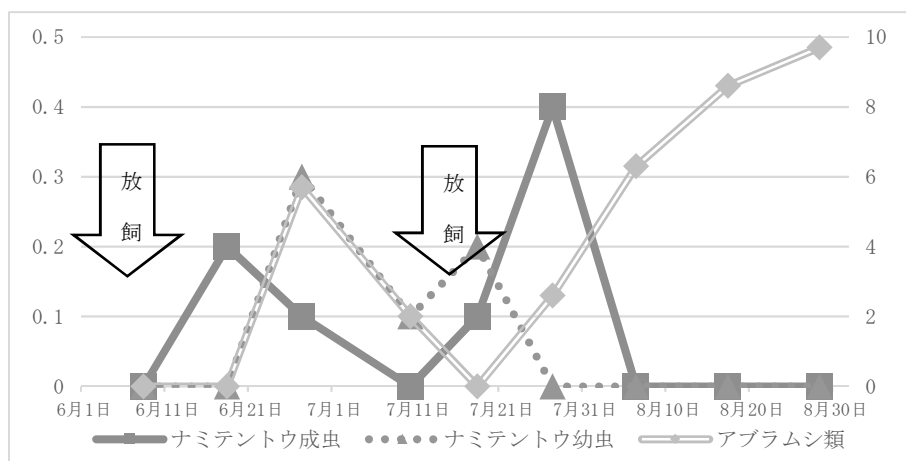


図1 ナミテントウとアブラムシ類の1株当たり寄生数

(左軸：ナミテントウ、右軸：アブラムシ類)

5 問題点と今後の展開方向

ナミテントウは、アブラムシ類による被害対策の選択肢の一つとして地域の生産者から期待されている。

しかし現地導入に際し、①盛夏期には天敵の生育に不適當な高温条件が続くため定着率が低い、②放飼前に株元に敷ワラを設置し、ナミテントウの転倒防止に努める必要がある、③定着期間が短く、追加放飼が必要になるといった問題点が存在している。

今後、ナミテントウの適切な活用方法について検討を進めながら、部会全体への情報提供を図っていく。

また、病害虫防除作業の省力化など、新たな課題への対応を図り、干潟地域のシシトウの産地振興の一助となるよう活動していく。



放飼前に株元に
敷ワラを設置する

(旭グループ 普及指導員 高田 伯約)